

焼物と流通



黄釉褐彩四耳壺

平泉出土の陶器

柳之御所遺跡からは多くの陶磁器が出土しています。陶磁器と一括することが多いですが、陶器と磁器は、使用する粘土や焼き方に大きな違いがあります。国内で磁器が作られるようになるのは17世紀初頭のことで、それ以前は陶器生産のみ行われ、磁器は中国から輸入されていました。中国からの輸入陶磁器は博多や京都を經由して平泉にもたらされたと考えられます。国産の陶器は、現在の愛知県に位置する渥美窯と常滑窯とが生産の中心で、平泉にも太平洋岸から北上川を通過して、多くの製品が運ばれています。これらの陶磁器類の流通から、奥州藤原氏が北上川を介在させて、広く都や海外との関係を保っていたことがわかります。また、北上川河口に近い石巻市水沼窯跡や、平泉町内でも花立地区に陶器窯が確認されています。これらは奥州藤原氏が関与して生産が行われたと考えられ、陶器を流通のみでなく生産にも関心を持っていたと考えられます。

常滑と渥美

出土した国産陶器の多くは渥美窯、常滑窯の製品です。渥美窯は12世紀初頭から生産が開始され、13世紀代まで生産が継続しました。平泉では甕類が多く出土しています。袈裟襷文と呼ばれる沈線が描かれたものが特徴的で、このほかにも刻画文が多くみられます。貼花文と呼ばれる、粘土を貼り付けて文様を描いたものもあります。常滑窯は12世紀前半に生産を開始し、現在まで窯業生産の中心地として栄えています。平泉では甕や壺、鉢が多く出土しています。三本の筋が描かれた三筋壺は特徴的な器種です。このほかに、古代の須恵器の系譜を引いた須恵器系陶器も出土しており、日本海側からとの流通も想定されます。

輸入陶磁器

輸入された陶磁器は中国からのものが多く、福建省などの中国南部から多く運ばれています。磁器には色調などから白磁、青白磁、青磁の3種類があります。

平泉では白磁が最も多く出土しています。器種は四耳壺や水注などの壺類が多く出土していますが、そのほかにも椀・皿類もあります。青白磁は数は多くないですが、合子の蓋など特徴的な器種が多くみられます。青磁は数が最も少なく、椀と皿にほぼ限られますが、内面に文様が施されるものもみられます。なお、後の鎌倉では青磁が多く出土しています。また、白磁には割れた部分を漆で接合しているものもあり、重要性がうかがえます。

このほかに中国産の陶器や朝鮮半島の高麗青磁なども出土しています。中国産の陶器には釉の色により、褐釉陶器や黄釉陶器があり、ほかに2色の粘土が用いられた絞胎陶器もあります。



陶磁器の流通



国産陶器



中国産磁器

銅印

井戸の中から出土した鑄造の銅製の印章です。印面には楷書で「磐前村印」と刻まれています。印面は一辺5cm弱です。凹みには朱肉の痕跡とみられる赤色が残っており、遺跡内で実際に使用されていたようすがうかがえます。裏側をみると穴の開いていない鈕の側面には、目印とした「上」の字も刻まれています。当時も印を付く際に上下を確認していたことが伝わってきます。

日本でも古代から「国」印などがありますが、「村」の印は全国でも初めての発見です。磐前村がどこを指すのかは不明ですが、奥州藤原氏の政治行政機能がうかがえる重要な資料です。

